

「ムネーメ」研究序論：リヒャルト・ゼーモンの生涯

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/4496129>

出版情報：かいろす. 59 (別冊), pp.19-42, 2021-10-27
バージョン：
権利関係：



「ムネーメ」研究序論

— リヒャルト・ゼーモンの生涯 —¹⁾

福 元 圭 太

0. はじめに

物質には記憶が宿る、有機体である生体にはエングラム (Engramm) という記憶の残存痕跡があり、その総体をムネーメ (Mneme) という——1904年にこのような主張を展開したのがリヒャルト・ヴォルフガング・ゼーモン (Richard Wolfgang Semon: 1859-1918) である。

記憶を通して情報の体系、例えば習慣や言語そのもの、また美術・音楽等の文化全般は、次世代へと受け継がれていくとされる。この遺伝子によらない文化伝達の単位を初めて仮定し、遺伝子 (gene) と韻を踏ませてミーム (meme) と命名したのは、『利己的な遺伝子』で有名なりチャード・ドーキンスであると言われている。しかし、ミーム理論の先駆者は実際には「ムネーメ理論」を提唱したりリヒャルト・ゼーモンであると言ってさしつかえない。

これから展開しようとしている研究は、生物学史的にはさておき、その文化史的・思想史的重要性にもかかわらず、ドイツにおいてさえほとんど忘れ去られ、ましてや本邦においては、最近までまったくと言っていいほど知られていなかった²⁾ゼーモンの「ムネーメ理論」の解明と、その影響の射程を測ることを目指す。³⁾

最初の課題は、「忘れ去られ」た科学者リヒャルト・ゼーモンとは、どのような

1) 本稿は科学研究費補助金基盤研究 (C)、課題番号 20K00499、研究課題名「物質に宿る記憶——リヒャルト・ゼーモンの「ムネーメ理論」研究」の一貫である。補助に対し、衷心より感謝申し上げる。

2) 研究の開始段階では、管見の限りゼーモン研究は皆無に等しかったが、2020年10月17日に岩波書店から〈名著精選 心の謎から心の科学へ〉全5冊中の1冊として、『無意識と記憶 ゼーモン／ゴルトン／シャクター』が刊行され、本研究で著者が解明しようとしていたゼーモンの著書 *Die Mneme als erhaltendes Prinzip im Wechsel des organischen Geschehens*. Verlag von Wilhelm Engelmann, Leipzig 1904. の一部が翻訳・紹介された (岩波書店版の佐藤駿による邦訳は『ムネーメ——有機的出来事の変遷過程における保存の原理』となっているが、筆者としては『有機的事象の変遷における保存原理としてのムネーメ』を提案したい。詳しくは本稿第5節を参照されたい)。それ自体まことに有意義なことであるが、本邦におけるゼーモン研究の端緒を開こうと準備を進めていたので、忸怩たるものがある。

3) さらに、ベルクソンの『物質と記憶』と「ムネーメ」との間に関連があるのかどうか、またアビ・ヴァールブルクの「ムネモシユネ」の議論に「ムネーメ理論」が与えたインパクトの射程を測ることも視野に入れている。

知的経歴を持ち、どのような業績のある科学者で、どのような思想を有していたのかを詳らかにすることであろう。⁴⁾ ゼーモンの生涯は「かなり注目すべき」(rather remarkable)⁵⁾ もの、いやきわめて劇的なものであると形容しても過言ではない。また後半生にムネーメ研究に集中した、ないし集中せざるをえなかった経緯も、その生涯を追うことで明らかになるであろう。

ゼーモンの生涯を辿るに当たって参照可能な文献の数はごく少数である。最も信頼できる伝記的記述は、ゼーモンと同じギムナジウムに通い、生涯友人関係にあったオットー・ルーバルシュが、ゼーモンの遺作⁶⁾を編集責任者として出版する際に記した小伝である。⁷⁾ 本稿の記述は、主としてこの「編集者による導入」(Einleitung des Herausgebers)という名のゼーモン小伝に拠っている。なおルーバルシュの個人的見解や独自の感慨などを除く事実関係に関する記述、例えばゼーモンが何年に生まれ、どこで働き、いつ調査旅行に出かけ、いつ亡くなったか等々は、引用符なしで記した。

この他にゼーモンの生涯を詳しく記したものに、ダニエル・シャクターによる著書『忘れられたアイディア、無視されたパイオニア リヒャルト・ゼーモンと記憶の物語』⁸⁾の前半部がある。英語による著作で、邦訳やドイツ語訳はない。シャクターは一次資料としてゼーモンの書簡類に丹念に当たっている。また遺族の一人にも面会してゼーモン家についてインタビューを実施し、写真資料も得たようだが、引用された一次資料が英語に訳されているので、適宜参照するにとどめた。シャクターのドイツ語読解能力があまり信頼できないのも、参照にとどめた理由である。⁹⁾ 以下ではルーバルシュがあまり触れていない部分をシャクターの記述で

4) これらに関する徹底的な調査をドイツの主としてイエーナで実施する計画であったが、新型コロナウイルスの爆発的な感染拡大により、渡独できない状態が2年近く続いている。今のところ数少ない文献に依存している状況にある。

5) Daniel L. Schacter: *Forgotten Ideas, Neglected Pioneers. Richard Semon and the Story of Memory*. Harvard University, Psychology Press, Taylor & Francis Group, Cambridge 2001. S. xi. シャクターはハーバード大学の心理学講座の教授。記憶研究の領域では著名である。

6) Richard Semon: *Bewußtseinsvorgang und Gehirnprozeß. Eine Studie über die energetischen Korrelate der Eigenschaften der Empfindungen. Nach dem Tode des Verfassers herausgegeben von Otto Lubarsch*. Verlag von J. F. Bergmann, Wiesbaden 1920. なお表紙の文字はBではなくssが用いられており、*Bewusstseinsvorgang und Gehirnprozess*. となっている。

7) Ebd., S. X-XLIV. の32ページ分である。

8) Daniel L. Schacter: a. a. O., S. 11-94.

9) シャクターは「まえがき」で、本書執筆のため、オーストリアの「インターナショナル・サマーコース」でドイツ語を学んだことを記している。また Agnes Kocsis という人が数多くの書簡類をドイツ語から英語に翻訳してくれたことにも謝意を評している。Ebd., S. xiii. シャクターはまた、イギリスに渡ったゼーモンの兄のことを非常に詳細に取り上げているが、おそらくそれは、ゼーモンの兄に関しては、英語資料が多いからであろうと思われる。ゼーモンの兄については、本稿では触れない。

補うという方針をとった。

1. ベルリンの幼年時代

ルーバルシュの記述はいきなりゼーモンの死から始まる。ゼーモンは1918年12月27日、ミュンヘンの自宅で自殺、翌28日に発見された。約9か月前に病没した妻の部屋が自殺の現場であった。ユダヤの出自をもつゼーモンはドイツ国旗¹⁰⁾の上で、心臓を撃ち抜いていた。

遺された原稿の出版は、ゼーモンがかつて属した研究組織を率いていたイエーナ大学のマックス・フューアブリンガー¹¹⁾に、もしそれが無理なら、友人であるルーバルシュに依頼すると遺言にあった。フューアブリンガーが高齢を理由に編集者となることを断ったため、ルーバルシュが編集・出版の労をとることになった。ゼーモンの「最も昔からの、彼に最も近い友人」(L-X)¹²⁾を自認するルーバルシュは、本を出すだけでは彼の親友の遺言を実行したことになるとは考えなかった。この「ユニークで重要な男の生涯を簡潔に記す」(Ebd.)ことがぜひとも必要である、と考えたのである。さもなければ、なぜゼーモンがこの世を去ろうと決意したのかを説明できないし、またゼーモンの生涯を辿ることで、「あれほど評判の悪い、古きプロイセン・ドイツの文化史」(Kulturgeschichte des so verleumdeten alten Preußen-Deutschlands) (Ebd.)をも、ある程度解明ないし釈明できると考えたからである。

リヒャルト・ヴォルフガング・ゼーモンは、1859年8月22日、ゼーモン家の第3子としてベルリンに生まれた。ゼーモンのミドルネーム、ヴォルフガングは、母親のゲーテ崇拝に由来するという(Ebd.)。8月はゲーテの生まれ月であり、ゼーモンはゲーテ生誕の110年後に生をうけたことになる。

この一事をもってしても、ゼーモン家の雰囲気を知ることができる。裕福で——ゼーモン家は代々商業に携わってきたユダヤ人の一家であった——芸術に理解があり、精神的なものに対する興味が支配的であった。もっともこれは当時のベルリンの富裕層一般の雰囲気であり(Vgl. L-XI)、ゼーモン家が特別というわけではなかった。1859年当時はまだ、内政・外交にわたる「政治的なもの」が、市民の

10) 1871年から1918年までの国旗デザインは、現在のドイツ連邦共和国で用いられている上から「黒赤金」ではなく、上から「黒白赤」である。これは1867年から1871年にかけての北ドイツ連邦旗のデザインを踏襲したものである。

11) Max Fürbringer (1846-1920) はドイツの解剖学者・鳥類学者。

12) Richard Semon: *Bewußtseinsvorgang und Gehirnprozeß*, a. a. O. の前半部にあるルーバルシュによる伝記的記述からの引用については、本文内に (L-X) ような形で示す。(L-X) は Lubarsch の X ページを意味する。また、オリジナルにある強調は、訳文に傍点を付した。

精神生活の中心を占めるまでには至っていなかった。しかし、プロイセンの首都ベルリンが急速に発展し、大都市化・世界都市化するにしたがって、市民の精神生活の内容も変わり始めることになる。

ゼーモン家は、当時はまだ牧歌的であった西部地区のケムパー広場 (Kemperplatz) に近いヴィクトーリア通り (Viktoriastraße) にあった。そこからケーニヒ広場まではジークスアレー (Siegesallee) が続いていた。ゼーモンは家から近いベルヴュー通り (Bellevuestraße) にあった新設の¹³⁾ 王立ヴィルヘルム・ギムナジウム (Kgl. Wilhelmsgymnasium) に通い、1879年の大学入学資格試験 (Reifeprüfung) 合格までそこに留まった。ルーバルシュはギムナジウム時代からのゼーモンの親友である。

ゼーモンの精神形成にとって決定的だったのは、このギムナジウムでの生活であった。それは、教師たちからの影響というよりは、さまざまな社会層出身の同級生たちがこの学校で切磋琢磨したことによる。このギムナジウムでは「ベルリンのみならず、プロイセン・ドイツの公的生活に何らかの意味をもつすべての社会層の子息たちが苦楽を共に」(Ebd.) していた。例えばオイレンブルク伯爵などの大臣や政治家たち、将軍や軍人たち、また官僚、産業・商業界の指導者たち、芸術家たち、出版・新聞界の大家たち (雑誌『クラデラダツチュ』の創刊者であるカーリッシュや出版人のホフマン等)¹⁴⁾ さらには外国からの要人や大使などの息子たちがいた。またデュ・ボアーレーモン、フィルヒョー、モムゼン、クルツィウス、ヘルムホルツといった錚々たる教授連¹⁵⁾ の息子たちも集っていた。若き日に互いに与えあった精神的刺激は、特に歴史的な大転換期を迎え、その力の頂点に向かいつつあった¹⁶⁾ プロイセン・ドイツであっただけに、より一層深甚で、長い射程をもって後の生涯まで残るものであった。¹⁷⁾

旧皇帝の名を持つこのギムナジウムでは「旧来のプロシア精神 (Preußentum) がことのほか醸成された」(L-XIII)。この時期、青年たちは祖国愛に熱狂し、そ

13) 1858年に創立され、1924まで存続した。

14) *Kladderadatsch* は政治風刺雑誌で、1848年から1944年まで週刊で出版された。「クラデラダツチュ」というのはベルリン方言の一種の擬音語で、「落ちて粉々になる」といった意味。創立者はユダヤ系商人で喜劇作家でもあった父をもつ、リベラルなユモリストのダーフィット・カーリッシュ (David Kalisch: 1820-1872) で、創立時の出版人はハインリヒ・ホフマン (Heinrich Albert Hofmann: 1818-1880) であった。

15) いずれも著名な人物なので、生没年などは略した。

16) 1866年の普墺戦争、1870年から1871年にかけての普仏戦争での相次ぐ圧倒的勝利、第二帝政の樹立期に当たっている。

17) 国家の大転換期、新たな政体の樹立というアナロジーで考えれば、我々はこの時期のプロイセン・ドイツの青年たちを、幕末から明治維新期にかけての日本の青年たちと比較できるかもしれない。

れは一生涯変わることがなかった。ゼーモンもまた「義務の厳密な遂行とスパルタ的規律」を「偉大で善きものとして」(Ebd.) 最晩年までもち続けた。ゼーモンの死の3か月前、ルーバルシュはゼーモンと、青年時代の教育について語り合っている。ルーバルシュは自分の親世代や自分の受けた教育が、1891年の学校改革後¹⁸⁾の教育よりも、人間の性格形成に多くの貢献をなし、「より統一的 (einheitlicher) でより完成度が高い (abgeschlossener)」(Ebd.) という考えを披歴した。改革後の教育は生ぬるく、そのような教育を受けた生徒たちは、のちに生のさまざまな困難に対処できなくなったのではないか、という意見を述べたのである。ゼーモンは、決して古典ギムナジウムの賛美者ではなかったが、ルーバルシュの意見に同意した。ゼーモンはまた「プロイセン人が他国の人から嫌われる主たる原因であると思われる『ポツダムの精神』 („Geist von Potsdam“)¹⁹⁾ には記念碑的な偉大さがあり、我々ドイツ人にとっては恵みである」(L-XIV) と語った。

古典ギムナジウムの賛美者ではなかったものの、ゼーモンが古典文学に見向きもしなかったわけではない。学年があがるとゼーモンの興味は自然科学に向けられるようになり、古典語・古典文学に関しては模範的な生徒ではなかったが、ホメロス、ホラティウスを愛好し、ルーバルシュと共にアルプスやイタリアに遊んだ時にも、ゼーモンはよくこれら古典詩人からの一節を愛誦した。

ギムナジウムの上級学年²⁰⁾に至ると、漠然とはあるが、将来の職業像を描く生徒が多くなり、その準備を実際に進める生徒もいた。また、雑誌に文学作品を投稿する生徒すら出始めた。生徒たちは、かたやヴァーグナーの総合芸術について、かたや国会内の党派の対立について議論を闘わせた。生徒たちはまた、ケラー、シュトルム、フライターク、C. F. マイヤー、ガイベルを読み、文学論に興

18) 教育改革に強い関心をもっていたヴィルヘルム II 世は、1890年12月に「学校会議」をベルリンに招集し、ギムナジウム (Gymnasium)、実科ギムナジウム (Realgymnasium)、高等実科学学校 (Oberrealschule) の代表者44名が議論を行った。しかし会議は、ヴィルヘルム II 世が敷いた既定路線を追認することに終始した。それは社会主義的・共産主義的な思想の蔓延に対抗して学校を政治化し、人格形成と訓育を通じて国家に奉仕する人材を養成することを意味した。また、生徒の負担過重の問題が以前から指摘されていたこともあって、特にギムナジウムでは負担軽減が図られた。具体的には、ギムナジウムにおいてはラテン語の時間が約20%、ギリシア語の時間が約10%削減された。また大学入学資格試験からもラテン語がはずされることになった。増えたのはドイツ語と体育の時間である。ドイツの古典的名作 (『ニーベルンゲンの歌』、『ゲッツ』、『エグモント』、『ヴィルヘルム・テル』、『ヴァレンシユタイン』等) が必修となり、ドイツの民族性が称揚され、その精神的卓越が強調された。一方実科ギムナジウムでは、自然科学や近代語を重視したカリキュラムが実施されることになった。以上については Margret Kraul: *Das deutsche Gymnasium 1780-1880*. Neue Historische Bibliothek, edition suhrkamp, Neue Folge Band 251. Frankfurt a. M. 1984. S. 100 ff. (邦訳: マルグレート・クラウル: 『ドイツ・ギムナジウム200年史 エリート養成の社会史』 望田幸男 他訳, ミネルヴァ書房, 1986年。100-109ページ) を参照した。

じたが、ショーペンハウアーやエドゥアルト・フォン・ハルトマンの哲学にはよそよそしい態度をとった。まだ無名であったニーチェの『悲劇の誕生』にも挑戦した。その本は、後に第一次世界大戦で没することになる音楽専攻の学生が持ち込んだものであった。彼らはまた、モムゼンのローマ史、クルツィウスのギリシア史の本を熱心に読み、デュ・ボア-レーモンやヘルムホルツの一般科学（大衆科学）的な講演に耳を傾けた。もっとも生物学に関しては、「もしもゼーモンがいなければ、まったく知らないか、せいぜいのところ、新聞に取り上げられた話題ぐらいしか知りえなかったであろう」（L-XVI）。

一方で生徒たちは、肉体的鍛錬にも余念がなかった。要するに首都ベルリンのエリート・ギムナジウムは、心身を鍛錬し、芸術や政治、またさまざまな学問に開かれた、全人格を陶冶する教育施設であった。それはプロイセン・ドイツにとって——軍事的にも政治的にも——有為の国民を創生するための、官制施設であったわけである。²¹⁾

上級学年に進む頃にはすでに、ゼーモンはダーウィンおよびヘッケルの主要な著作を読破していた。彼はまた、爬虫類や両生類を入手し、自室で飼育してもい

19) 「ポツダムの精神」が何を指すのか、ルーバルシュは記述していないが、ショービニズム的なプロイセン精神（Preußentum）とほぼ同義と考えてよい。第一次世界大戦に敗れ、ヴィルヘルム II 世が退位してオランダに亡命したことで、プロイセン主義者たちは精神的オリエンテーションを喪失した。彼らは古き良き、そして強かった頃のプロイセン（1713年から1786年までのフリードリヒ・ヴィルヘルム I 世とフリードリヒ II 世（大王）の治世）にノスタルジックな慰撫を求めた。当時は軍事的な増強が至上命題で、1740年には国家予算のなんと81%が軍事費であったという（Vgl. Hans J. Hillerbrand: *Das Bündnis zwischen Thron und Altar, 1688-1740*. In: Julius H. Schoeps (Hrsg.): *Preußen. Geschichte eines Mythos*. Berlin 2001. S. 30-45. 軍事費に関する数字は S. 36.）。1918年のこの精神はまた、反社会民主主義や反ユダヤ主義を糾合していった。「ポツダムの精神」にのちに対置されるのが、「ヴァイマルの精神」である。「ポツダムの精神とヴァイマルの精神」（Der Geist von Potsdam und der Geist von Weimar）は1926年の帝国創立記念日に、イエーナの哲学教授ブルーノ・バオホ（Bruno Bauch）が行った講演のテーマでもあった。要するに「ポツダムの精神」はヴァイマル共和國的なものとことごとく対置されるもので、のちのナチズムのイデオロギー的萌芽と言えよう。事実、1918年から1933年までの間に、ポツダムのガルニゾン教会（Garnisonkirche）では、80回を超える極右的な傾向をもつ政治集会が開かれている（Vgl. Matthias Grünzig: *Für Deutschland und Vaterland*. Berlin 2017. S. 129 ff.）。以上については、マティアス・グリュンツィヒの2017年3月18日付の以下の URL にある講演原稿を参照した。

https://www.bundes-esg.de/fileadmin/user_upload/aej/Studium_und_Hochschule/Downloads/Themen/gruenzig_GarnisonkircheVortragGeistWeimarText.pdf

20) ルーバルシュはSekundaと記している。これは9年制ギムナジウムの第6学年（Untersekunda）、第7学年（Obersekunda）を指す。年齢的にはおおそ16～17歳で、日本の学制で言えば、高校1年生、2年生に当たる。

21) 例えばニーチェが1872年にに行った連続公演「我々の教育施設の将来について」（Über die Zukunft unserer Bildungs-Anstalten）等、この時期のプロイセンの教育施設に対する批判は枚挙に遑がないが、本稿では触れない。

た。自慢はアホロートル²²⁾で、友人に見せたりもしていた。しかしゼーモンは他の分野にも興味を示し、例えば音楽に関しては、生涯シューマンの熱烈な賛美者であったし、先述のようにホメロス、ホラティウスも愛好していた。わざわざベルリン大学までアドルフ・ラッソン²³⁾のレッシングに関する講義を聴きに行ったこともある。もっともゼーモンは、興味が分散している学生にありがちなことだが、「最も優秀な生徒の一人ではなかった」(Ebd.)。特に古典文法は不得手であった。数学は得意ではあったものの、オリジナルな解法に凝ってしまい、単純な計算間違いが多かったため、教師の受けはよくなかった。

2. 学生時代

大学入学資格試験合格後、1年間の兵役を「大いなる喜びとともに」(L-XVIII) 済ませたゼーモンは、さっそくイエーナのヘッケルの元へと向かう。ゼーモンはそれから30年を経た後でも、ヘッケルを「偉大な研究家にして思想家」であるだけでなく、「偉大な人格であり、その崇高な目的への献身、本来的必然性を伴った理想主義と信条の大胆さは、弟子たちの内面に熱狂と魅了を惹起せずにはおれなかった」(Ebd.)²⁴⁾ としている。ゼーモンがヘッケルから学んだことは、ゼーモン自身が書いているように「思考・研究・生の方法としての一元論」(*der Monismus als Methode des Denkens, Forschens und Lebens*) (Ebd.)²⁵⁾ であった。これはいわゆる「哲学的な党派の原則」(Ebd.)²⁶⁾ を意味しない。そうではなく、ゼーモンがヘッケルに学んだのは、ヘッケルが「個々の部分を手に入れることでは決して満足せず、自然全体の統一性に内心深く浸され、あらゆるものを精神的な紐帯で統一し、いかなる経験の源泉をも、それ自体価値の劣るものとして無視したり拒絶したりすることがなかった」(Ebd.)²⁷⁾ 点にあった。ヘッケル自身が大いなる矛盾の統一体であった。進化論者・無神論者であると同時に自然を神そのものとするある種の

22) Axolotl はメキシコ産のサンショウウオの一種。

23) Adolf Lasson (1832-1917) はユダヤ系のドイツの哲学者。1853年にキリスト教に改宗。高等学校教員を経て1877年以降ベルリン大学の私講師。

24) ゼーモンのヘッケルに関する評言は、ルーバルシュが以下の本から引用したものである。Richard Semon: *Aus Haeckels Schule*. In: *Was wir Ernst Haeckel verdanken. Ein Buch der Verehrung und Dankbarkeit*. Im Auftrag des Deutschen Monistenbundes, herausgegeben von Heinrich Schmidt. Verlag Unesma, Leipzig 1914. Erster Band, S. 217 f. ここは同書 S. 217からの引用。

25) Ebd., S. 222からの引用。

26) ルーバルシュは[*ein*] philosophische[*r*] Parteigrundsatz[*]* という語を用いている。ヘッケルを領袖とし、1906年に創立された「ドイツ一元論者同盟」(Der deutsche Monistenbund) (ゼーモンもその創立者の一人であった) が、政治的にも党派的で闘争的であったことに基づく表現であると思われる。なお「ドイツ一元論者同盟」は1933年にナチスによって禁止され、解体した。

27) Richard Semon: *Aus Haeckels Schule*. a. a. O., S. 221からの引用。

汎神論者であり、一元論を体現し実践する巨大な人格であった。²⁸⁾

ゼーモンは生徒時代からすでに、進化論上のいわゆる「ミッシング・リンク」²⁹⁾に多大な興味を示していた。あるいはこの「欠けたピース」がそこで見つかるのではないかと、早くからオーストラリアに行くことを熱望していた。ゼーモンは医学も学んだが、それは医師であるほうが調査のための探検隊に同行できる可能性が高いという理由からであった。ゼーモンは1882年からハイデルベルク大学で医学を学び始めるが、同時にビュッチュリ³⁰⁾のもとで棘皮動物類門ナマコ綱(Holothurien)の神経システムに関する論文を執筆し、博士号を得た。1884年12月に医師の国家試験に合格。早速調査のための探検隊に参加しようとした。将来探検調査隊に加わることを考えていたのであろう、学生時代にもゼーモンは肉体的鍛錬を欠かさなかった。器械体操、水泳、フェンシングに乘馬、また医師国家試験の前にはチューリヒ湖でヨットセーリングに興じ、ルーバルシュとはエンガーディン³¹⁾でクライミングをした。その後もゼーモンは終生スポーツを愛好し、狩猟も行った。その死の2、3年前までは、お気に入りだったドロミテ・アルプス³²⁾でかなり危険なクライミングも実行している。

オーストラリアに先立って、まずはアフリカへの調査旅行に行く前に、ゼーモンは「周囲の人たちからの疑念と誤解を招く」(L-XX)行動をとった。プロテスタントに改宗したのである。当時の北ドイツ、また特にベルリンでは、まだ反ユダヤ主義が盛んであった。ゼーモンの改宗を同じくユダヤ人であるルーバルシュ

28) ルーバルシュが引用しなかった部分で、ゼーモンがヘッケルから学んだことが如実に分かる一節がある。我々は動物と植物、人間と動物の間には深い溝があると考えてきた。人間の中にも分裂を見てきた。つまり「肉体と魂」(Körper und Seele)が「ただ一種の共生状態で」(nur in einer Art Symbiose)生きていてと考えてきた。この魂もまた鋭く二面に、つまり「思考と感情」(das Denken und das Fühlen)に分かれると考えた。研究者にとってはこの分裂は専門に閉じ籠り、専門領域だけに安住するためには、誘惑でもある。そうすると、この「自分で作った万里の長城の向こう側」(jenseits seiner chinesischen Mauer)のことは、放擲してしまって気にかけなくても済むからである。人文科学は自然科学から誇り高く距離を取るが、後者はまた古典人文学者を「ある種の生きた化石」(eine Art lebendes Fossil)と揶揄するのである。自然科学者の中でも分裂が起こる。物理学者は生物学者を無視するのだ、云々。「」の引用はすべて Richard Semon: *Aus Haeckels Schule*. Ebd., S. 218.

29) 生物の進化過程には連続性が欠落しているように見える部分がある。その前後、つまり祖先群と子孫群の間にあるはずの生物や化石が発見されていないため、両者に間隙が生じているように見えるのである。生物進化の過程を鎖に譬え、その間隙、つまり「欠けている部分の環」をミッシング・リンクと呼ぶ。

30) Otto Bütschli (1848-1920) はドイツの動物学者。

31) die Engadin はスイスのグラウビュンデン州にあるイン川渓谷地帯で、ザンクト・モーリッツが最大の町。

32) die Dolomiten は東アルプスの一部で南チロルにそびえる、主として白雲岩(Dolomit ドロマイト)からなる。標高3342メートル。

は、「宗教的な感情からではなく、おそらくは国家的な (national) 感情から」(Ebd.) の改宗でないか、と推測している。生涯ゼーモンは、ユダヤ性を、特に大都市的なユダヤ性 (das großstädtische Judentum) を、徹底的に嫌悪していた (Vgl. Ebd.)。³³⁾ ゼーモンは終生——もっとも死の直前の2年間は、民主主義的な思想にある程度影響されていたのではあるが——筋金入りのビスマルク賛美者で、プロイセン主義者であった。ただし、その弱点や強引さを理解してもいた。ユダヤからの離反をルーバルシュは、自らの「一元論的な生の規範に照らし合わせて」(Ebd.)、内面的な繋がりを全く感じなかったユダヤ的なものからは、実際上も離れる義務があり、それは当然の成り行きであるとゼーモンは考えたのであろう、と推測している。かくしてゼーモンは、ドイツに偉大さもたらしたと自ら考えるところのもの——「プロテスタントのプロイセン主義 ([der] evangelische [] Preußentum)」(Ebd.)——に帰依することになった。³⁴⁾ ゼーモンの改宗は、真剣かつ慎重な考慮の末の行動であり、キャリアアップのためといった動機はなかったとルーバルシュは言う。³⁵⁾ しかし、そのような誤解を容易に招きかねなかっただけに、一層勇気が必要な、大胆な行為ではあった。

3. アフリカ・オーストラリアへの調査旅行

ベルリンに戻ったゼーモンは、フィルヒョーの仲介でローベルト・フレーゲル³⁶⁾ のアフリカ調査隊に加わることになった。まずベヌエ (Benuë) 川地帯へ赴いたゼーモンはそこで医師として採用され、1885年4月6日にラゴス (Lagos)³⁷⁾ へ移

33) ユダヤ人の自己嫌悪、例えばまさに『ユダヤ人の自己嫌悪』(Der jüdische Selbsthaß. 1930) を書いたユダヤ人テオドル・レッシングや、オットー・ヴァイニンガーのそれに関する問題は、本稿とは別の問題である。

34) ユダヤ人のルーバルシュもまた、のちにプロテスタントに改宗している。

35) ゼーモンのキリスト教への改宗についてシャクターは、メンターであったヘッケルの歎心を買おうという動機も部分的にはあったのではないかと (partially motivated by a desire to please his mentor) (Daniel L. Schacter: a. a. O., S. 35.) と推測しているが、ややうがちすぎであろう。ヘッケルは人種主義者ではあったが、激しい反ユダヤ主義者ではなかった。佐藤恵子『ヘッケルと進化の夢——一元論、エコロジー、系統樹』工作舎、2015年、289ページ参照。ただ、統計的に見ると、ユダヤ人であることで大学における昇進が阻害される傾向はあった。シャクターが引いている数字を挙げれば、1909年から1910年にかけて、大学の講師クラスにおけるユダヤ人が占める割合は12%であった。しかし、教授クラスとなると全体の3%以下に低下する。キリスト教への改宗者 (apostates) まで含めると、講師クラスに関しては19%まで、教授に関しては7%まで上昇する。キリスト教への改宗が当時のドイツの大学でのキャリアアップに資することは、数字の上では明らかである。なお、当時ドイツの人口に占めるユダヤ人の割合は約1%であった。シャクターが参考にした資料は、Fritz. K. Ringer: *The decline of the German mandarins: the German academic community, 1890-1933*. Harvard University Press, Cambridge 1969. S. 136. (邦訳:『読書人の没落: 世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』西村稔訳、名古屋大学出版会、1991年)。

動。そこからベヌエ川沿いに内陸へ向かった。フレーゲルはアダマウア (Adamaua)³⁸⁾ から、おそらくは存在するであろう水路を用いてチャド湖へ、さらに未踏破ルートを通して海岸沿いまで下り、そこからカメルーンへ向かうことを目論んでいた。³⁹⁾ ゼーモンはフレーゲルから、別動隊を率いてソコト (Sokoto)⁴⁰⁾ へ行き、そこで原住民の部族長にドイツ皇帝ヴィルヘルム I 世⁴¹⁾ からのプレゼントを渡す任務が与えられた。

この調査にはしかし、イギリスからの妨害があった。イギリスの王立ニジェール会社 (Loyal Niger Company)⁴²⁾ が、この純粋に学問的な調査に、商業的な目的を疑ったからである。マラリアへの罹患がさらなる支障を惹起した。ゼーモンもまた重症のマラリアに罹った。そして7月末にはヨーロッパに戻らなくてはならなくなった。アフリカの川を下る船上でゼーモンは生死の境を彷徨うことになる。しかし2週間後にはなんとか回復し、その後ロンドンで8日間にわたるマラリアのぶり返しをも克服、9月末には健康体でベルリンに帰還することができた。

その後数年間、ゼーモンは動物学・進化学の研究に邁進し、1885年からはナボリの動物学研究所で、海洋生物の形態学や生物学の研究に携わった。1886年末にドイツに帰国すると、イエーナ大学解剖学研究所の助手となった。所長はオスカ・ヘルトヴィヒ⁴³⁾ であったが、彼が間もなくベルリンに招聘されたため、マックス・フューアブリンガーが後を襲った。言うまでもなくイエーナは進化論研究

36) Robert Flegel (1852-1886) はドイツの探検家・アフリカ研究者。1884年にドイツがカメルーンを植民地支配し始めてから、奥地へのドイツ勢力の拡大に尽力したが、その2年後にはナイジェリアで客死する。ゼーモンが加わったのはフレーゲルの3度目のアフリカ探検隊である。そのときはベヌエ川の水位が低く、内陸への船足が遅かったらしい。

37) 現在ではナイジェリア最大の都市。

38) 現在ではナイジェリアとカメルーンに同名の州が存在するが、ここはおそらくナイジェリアのそれを指すと思われる。

39) 1885年当時のアフリカにおけるドイツの植民地は、以下のようになっていた。①ドイツ領南西アフリカ (Deutsch-Südwestafrika 1884年-1918年：今日のナミビアに当たる)。②ドイツ領東アフリカ (Deutsch-Ostafrika 1885年-1918年：今日のタンザニアの大陸部分 (タンガニーカ)、ルワンダ、ブルンジに当たる)。③ドイツ領西アフリカ：③-1 ドイツ領カメルーン (Kamerun 1884年-1918年：今日のカメルーンに当たる。③-2 ドイツ領トーゴラント (Togo 1884年-1918年：今日のトーゴ (トーゴラント) 及びガーナ東部に当たる)。④ドイツ領ヴィトウ (Deutsch-Witu 1885年-1890年：今日のケニアの一部。ヘルゴランド＝ザンジバル条約により、1890年イギリス領になる)。ゼーモンはこのうち、③-1 の地域に赴いたことになる。

40) 現在ではナイジェリア北部の都市。

41) ヴィルヘルム I 世は1888年3月9日に91歳で逝去、その後フリードリヒ III 世が後を継ぐが、在位わずか99日で病没し、1888年6月15日、29歳のヴィルヘルム II 世が即位する。新皇帝がこのちビスマルクと対立していくのは周知のことであろう。

42) ルーバルシュは National African Company (L-XXI) としているが、誤りであろう。

43) Oskar Hertwig (1849-1922) はドイツの解剖学者・動物学者。

のメッカであり、ヘッケルの牙城であった。ゼーモンはヘッケルからの他、生理学者ビーダーマン⁴⁴⁾の薫陶も受けた。

1887年に教授資格論文が受理されて私講師となったゼーモンは、1890年の末に助教授昇進、1897年までそこにとどまることになる。その間、ゼーモンは念願であったオーストラリアへの長期調査旅行へ赴く。出発は1891年6月のことであった。ヘッケルもこの調査を全面的に支援し、スポンサー紹介の労も厭わなかった。ヘッケルが取り付けたスポンサー、パウル・フォン・リッター博士⁴⁵⁾はバーゼルの資産家で、進化論・系統発生研究を振興していた。ゼーモンはリッター博士から、金銭的な支援を受けることができた。この金銭的支援こそがオーストラリアへの長期調査旅行が成功する鍵であったことを、ゼーモンは後に記している。

ゼーモンは研究者としてだけではなく、オーガナイザーとしての才能も発揮し、調査は大成功を収めた。1891年9月から1892年の1月末まで、また1892年の7月初めから同年10月半ばまでオーストラリアのブッシュでキャンプを張ったゼーモンは、現地人アボリジニ⁴⁶⁾を狩人・漁師・収集者を兼ねる部下として多数雇い、主として「オーストラリアハイギョ」(*Ceratodus Forsteri*)のサンプル調査と収集に当たることとなった。この調査の主たる目的はオーストラリアの脊椎動物相の研究、特に有袋類(Marsupialien)やカモノハシ(Monotremen)、またハイギョ(Dipnoer)の比較形態学的研究であったが、動物学的なシステム全般ないしは生物学全般にわたる問題にもゼーモンは関心を示した。

調査報告書とは別に、人間をも含むオーストラリアの自然全般を、広い視野で考察した本が『オーストラリアの叢林と珊瑚海岸にてある自然研究者の旅の体験と観察』⁴⁷⁾であった。ゼーモン直属の講座主任にあたるマックス・フューアブリンガーは、本書を「調査対象となった地域とその住民だけでなく、地理学一般およ

44) Wilhelm Biedermann (1852-1929) はドイツの生理学者・医師。

45) Paul von Ritter (1825-1915) はロシアのベテルスブルクに生まれたが、両親はリューベック出身で、ロシアで銀行を設立し、財を成した。パウルはロシアのアレクサンドルⅡ世(ロマノフ朝第12代ロシア皇帝で、在位は1855-1881年)の宮廷に仕えていたが、1863年にドイツに移住。ドレスデン、ルガノと居を移したのち、1883年にバーゼルに落ち着いた。イエーナ大学に多額の私財を投じて系統発生学(Phylogenie)の寄付講座を設けたことにより、同大学から名誉博士号を授与された。

46) ルーバルシュは黒人(Neger)としているがアボリジニが正しい。なおオーストラリアでの採検調査の様子は、Daniel L. Schacter: a. a. O., S. 42-53. に詳しい。アボリジニを雇用する際、ゼーモンはアルコール(ラム酒)を提供して彼らの意欲を引き出していたらしい(Ebd., S. 43.)。現在から考えるといかにもオリエンタリズム的・植民地主義的な方法であるが、当時は問題視されなかった。

47) Richard Semon: *Im australischen Busch und den Küsten des Korallenmeers. Reiseerlebnisse und Beobachtungen eines Naturforschers*. Verlag von Wilhelm Engelmann, Leipzig 1896.

び自然研究にとって、最も重要な本の一つとなる深遠な書物」(L-XXIV, Anm. **) ⁴⁸⁾ であるとしている。本書は動物学の本、また旅行記としても貴重だが、その内容は地学、古生物学、民族心理学、人類学、比較言語学などにわたっている。

フューアブリンガーはまた、『ゼーモン教授の動物学的調査旅行の内容に関する最終報告』で、ゼーモンが2021種 (Art) もの動物を扱い、207の新種 (Novae species) を発見したこと、24の新しい属 (Nova genera) を発見し1つの属についてはそれどころか、新しい科 (Familie) ⁴⁹⁾ の唯一のサンプルであったことを記している (Vgl. L-XXVII). ⁵⁰⁾ フューアブリンガーによれば、ゼーモンのオーストラリアにおける調査の主たる目的は、「これまであまり知られてはいなかったが、学問的に特に重要な動物の生態と発達段階の観察」ならびに「極力多数の、極力保存状態のよいサンプルを、形態学的研究、また特に個体発生に関する研究のために」(Ebd., zitiert nach Lubarsch) 収集することにあった。

収集された膨大なサンプルを整理するために、ゼーモンはもとより、ヘッケル、フューアブリンガーが共同で編集委員会を結成し、多くの協力者とともに、サンプルの分類とその書籍資料化が行われた。ここでも資金を援助したのは、パーゼルのフォン・リッター博士であった。また出版者グスタフ・フィッシャーも多大なコストを負担して、向後20年の間に資料集が漸次出版されることになった。中には大家も含まれる77名の専門家が、ゼーモンの収集したサンプルの学問的な整理に参画し、6巻からなる『オーストラリアならびにマライ諸島における動物学的調査旅行』⁵¹⁾ が出た (図1, 図2)。全5407頁, 343枚の全ページ図版 (Tafel), 1810個の文中挿絵, 112本の個別論文を掲載した、実に堂々たる業績であった。フューアブリンガーは本書のもとになった調査旅行について、「この分野で同じことを成し遂げられたかもしれない調査旅行を我々は知らない」(Ebd.) ⁵²⁾ とし、ゼー

48) ルーバルシュの引用による。L-XXIV, Anm. **, オリジナルは Max Fürbringer: *Schlussübersicht über den gesamten Inhalt von Professor Semon's Zoologischen Forschungsreisen*. Verlag Gustav Fischer, Jena 1913. S. 1498 の欄外注1)。ルーバルシュはフューアブリンガーの報告のタイトルを *Schlußbericht* と書いているが、*Schlussübersicht* が正しい。またフューアブリンガーの文章をそのまま引用しておらず、「深遠な本」を先行詞とする関係文を作っており、その意味では正確さに欠けているが、内容は正しく伝えている。

49) 上位概念から界 (Reich), 門 (Stamm), 綱 (Klasse), 目 (Ordnung), 科 (Familie), 属 (Gattung = Genus), 種 (Art)。

50) Max Fürbringer: a. a. O., S. 1548.

51) *Zoologische Forschungsreisen in Australien und dem Malayischen Archipel*. Mit Unterstützung des Herrn Dr. Paul von Ritter. Ausgeführt in den Jahren 1891-1893 von Richard Semon. Verlag Gustav Fischer, Jena 1893-1913. なおマライ諸島は正書法上 der *Malaiische Archipel* と書くのが正しいが、オリジナルは Malayisch となっている。

52) Max Fürbringer: a. a. O., S. 1549.

モンの成果がまさに前代未聞であることを強調している。

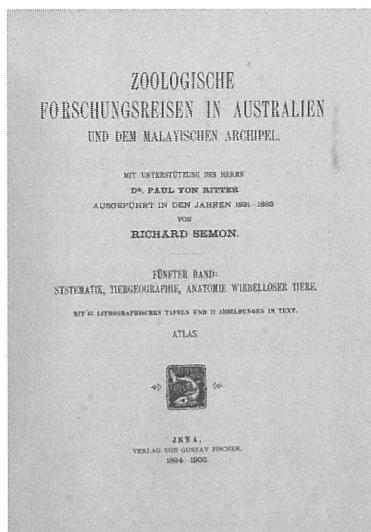


図1 *Zoologische Forschungsreisen in Australien und dem Malayischen Archipel*. 第5巻の表紙

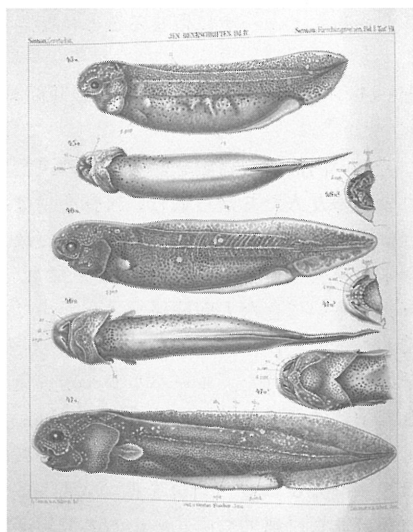


図2 第4巻所収「ハイギョ」図版の一葉

4. 醜聞

順風満帆にして前途洋々であったゼーモンは、それから4年間、学問的な仕事や上述の調査報告書の編集に邁進したが、1897年の夏、きわめて私的な理由で、イエーナにおける地位を放棄せざるをえなくなる。友人でもあった同僚の妻⁵³⁾と不倫関係に陥り、結果的にその女性を友人から奪ってしまったのである。ルーバルシュの筆もここではやや慎重になっている。

ゼーモンと、その友人で同僚である人の夫人との間に、深い情愛が生まれた。二人はこの情愛の念に打ち克つことはできないと考えた。離婚やむなし、と

53) 女性の名は Maria である。ゼーモンの同僚で医師・病理学者であったルードルフ・クレール (Ludolf Krehl: 1861-1937) の妻。二人の間には何人か子供があった。固陋なヴィルヘルム体制下でこの醜聞は、「考えられないほど非道なもの」(the unthinkable atrocity) であり「神聖犯すべからざる中流階級のモラルに対する恐ろしい侵犯行為」(a horrifying violation of sacred middle-class morality) であった。Daniel L. Schacter: a. a. O., S. 55.

いうことになり、1年半ののち、夫婦の合意が成った。ゼーモンの未来の妻が彼女のこれまでの夫に、彼のもとを去る決意を伝えたとき、ゼーモンはもちろんイエーナに留まることはできなくなっていた。(L-XXVIII)⁵⁴⁾

ゼーモンとその女性はその後、短期間ロンドンに滞在、さらにミュンヘンへ移った。⁵⁵⁾

苦しい内面的な葛藤を伴ったその決定は、当然のことながら、大学関係者やこれまでの友人たちから厳しい糾弾を受けた。二人が失ったものも大きかった。女性はその子供たちと、彼女が非常に尊敬していた夫を、また社会的なステータスや未来を失った。ゼーモンもまた、アカデミズムにおける将来のキャリアと、これまで築いてきた人間関係を失ったのである。二人はしかし、その後はほぼ19年間にわたって、幸福な結婚生活を送った。妻は精神的な興味をゼーモンと分け合い、その仕事を助けた。ルーバルシュが編集の労をとった遺作を含め、ゼーモンが遺した学問的な原稿には、彼女の手の跡が見られる。

1918年の春、ゼーモンの妻となった人は、長い闘病の末に他界した。ゼーモンはルーバルシュに、自分を他の人間たちに繋いでいた細い糸が切れてしまった、自分は非常に孤独を感じているので、学問的な仕事も今後は何の慰めにも人生の目標にもならない、と伝えている (Vgl. L-XXIX)。

かくしてゼーモンは、イエーナでのキャリアを投げ出さざるをえなくなった。きわめて優秀で業績もある人間が、再び大学で職を得られなかったのは残念なことではある。「もしゼーモンがどこかで職を得ようと大いに努力していれば、あるいはそれが可能だったかもしれない」(Ebd.)。しかし、とルーバルシュは言う。「彼にとっても学問にとっても、それは不幸ではなかった、いやむしろ幸運だった

54) 捨てられた夫ルドルフ・クレールもこの「トラウマ的な出来事」のあとイエーナを離れている。しばらく「ノマド的暮らし」(nomadic existence)をしたのち、1899年にマクデブルク大学、1900年にグライフスヴァルト大学、1904年にシュトラースブルク大学に移り、1906年から1933年までハイデルベルク大学に奉職した。Vgl. Ebd., S. 56.

55) ゼーモンたちは最初、南部郊外のイーザル川沿いにある Prinz Ludwigshöhe の Ludwigshöherstraße 6 に居を定めたが、1906年夏に、ミュンヘンの文化的な中心地である Schwabing の Leopoldstraße にある凱旋門 (Siegstor) の近く、Martiusstraße 7 に移る (Vgl. Ebd., S. 67.)。街中ではトーマス・マンやハインリヒ・マンとすれ違っていたかもしれない。なお1905年から妻のマリアは病気がちになっている。1913年には同市内やや北西部の、交通の便も悪くなり、Martiusstraße ほど古き良き街並みを残していない Hohenzollernstraße 130 に引っ越しているが (Vgl. Ebd., S. 74.)、その理由は分からない。度重なる大旅行、外国滞在、家賃、病気の治療などにかかる財政的な負担をどう賄っていたのかについては、想像の域を出ないが、夫婦二人とも「定職」がなく、ゼーモンの本の印税は期待できないことから、シャクターは「唯一考えられる収入源は、妻マリアの実家からの援助ではないか」(The one remaining possible source of income is Maria's family.) と推測している (Vgl. Ebd., S. 74, Anm. 8.)。

のではないか」(Ebd.)。と言うのも、ゼーモンは研究と教育とが内的に統合され、一体となっているタイプの学者ではなかったからである。

ゼーモンは教えることによって新たな研究への刺激を得たり、新しい考えや発見を学生に伝えたりすることが内的欲求であるようなタイプの教師ではなかった。「彼は確かに有能で誠実ではあったが、学生を強く惹き付け、魅了するような教師ではなかった。その上彼は話下手であった」(L-XXX)。ゼーモンは人前に立つといつも強い気後れを感じていた。ギムナジウム時代の同級生も、ゼーモンが古典語の訳を当てられた時に立ち往生すると、彼をからかった。訳せないからではなく、話したり語ったりする際にゼーモンが強い内的な気後れを感じていたからである。

1910年12月12日にミュンヘンで「獲得形質の遺伝問題について」(Die Frage nach der Vererbung erworbener Eigenschaften) という講演を行った際も、ゼーモンは日記に「まさに失敗だった」(Ebd., zitiert nach Lubarsch) と書いているが、それは大げさな自己卑下ではなかった。ゼーモンは自分でも話下手であることをよく知っており、1913年に講演を依頼してきたウィーンのパウル・カムメラ⁵⁶⁾宛てに「ベストを尽くしますが、あまり期待なさらないでください。私は上手な講演者ではありません」(Ebd.)⁵⁷⁾と書き送っている。ルーバルシュは、ゼーモンがその後教職に就かなかった、ないし就けなかったことは、彼自身と周囲の人たちにとっては「大きな損失ではなかった」(Ebd.)ばかりでなく、どこの組織にも属さなかったことで、時間を食う雑務から解放されたと言えなくもない、と書いている。もっとも、ゼーモンもルーバルシュと同じ意見であったかどうかは、知る由もない。

ゼーモンは大学の研究施設から離れざるをえなかったために、動物学、比較解剖学、進化論の専門的な研究からは遠ざかった。これらかつての専門領域についてゼーモンは1897年以降、小さな論文を公表するのみであった。またこれら小論の素材も、すでに公表していたハイギョとカモノハシの進化論的發展に限られていた。

ゼーモンはもともと、限定された領域の専門的研究に邁進するタイプの学者であった。しかしそれが不可能になったことが、幸か不幸か、ゼーモンが後半生に、

56) Paul Kammerer (1880-1926) はオーストリアの生物学者。獲得形質の遺伝というラマルク主義を実証しようとしたサンバガエル(産婆蛙: Geburtshelferkröte)の実験で名高いが、この研究データの捏造を疑われ、それが原因で自殺した。データが捏造されたのかどうかはいまだ決着がついていない。

57) ゼーモンからの手紙の閲覧に対し、ルーバルシュはカムメラに謝意を示している。L-XXX, Anm.*

生物学全般にわたる大胆な理論を構築する契機となった。もしもあの醜聞によってアカデミズムから締め出されていなかったとすれば、ゼーモンはその後「ただ一つの自然哲学的思想を考え抜くことに一身を捧げる」(sich so ganz der Durcharbeitung eines einzigen naturphilosophischen Gedankens zu widmen) (L-XXXI) ことはなかったであろう、とルーバルシュも言う。その意味ではあの醜聞はゼーモンの「全体としての発展にとっては有利に働いた」(Ebd.) と言えなくもない。この「自然哲学的思考」こそが、我々が解明しようとしている「ムネーメ理論」に他ならない。

5. 「ムネーメ」研究へ

1899年、ゼーモンは1897年の夏に共にイエーナを去った女性と結婚した。二人は、幾度かの大規模な外国旅行——イギリス、スコットランド、ロシア、アルジェリア、フランス、イタリア、オランダ、ベルギー——の期間を除くと、ミュンヘンに居を定めていた。ゼーモンは、雑務に煩わされない在野の学者として過ごしなが、生物学全般にわたる問題に取り組むことになる。それは「有機体が絶えず変化しているのに、確固とした統一的な持続はいかにして可能なのか」(wodurch im Wechsel des organischen Geschehens ein fester einheitlicher Bestand aufrecht erhalten wird) (L-XXXII)⁵⁸⁾ という、生物学の根本的な問題を端的に問うものであった。ゼーモンは「何らかの形の再生 (Reproduktionen) を本質とする有機的世界のすべての現象には、同一の自然法則が働いて」おり、そこで機能しているはずの「有機的実体 (Substanz) が持つある特殊な性質」(Ebd.) を科学的に究明することで、その答えが得られると考えた。そしてその「特殊な性質」をゼーモンは「ムネーメ」(Mneme) (Ebd.) と名づけたのである。

この「最初はただの遊戯的な比喻としか聞こえなかった思想」(Ebd.) を科学的なテーゼにすることが、ゼーモンのその後20年にわたる生涯の課題となり、その課題への取り組みは粘り強く貫徹された。ゼーモンがムネーメの考えをまとめ始めたのは1900年から1901年にかけてのことである。ゼーモンはまず、1901年の1月から2月にかけて、「時間記憶。生物学的根本問題の単純化の試み」(Zeitgedächtnis. Ein Versuch zur Vereinfachung der Grundprobleme der Biologie) という草稿を執筆した。これを書いた当時、ゼーモンはヘーリング⁵⁹⁾ の1870年の講演原稿「有機的

58) この問題を深く掘り下げるのは次項以降になるが、ゼーモンの問題意識は本邦においては福岡伸一が近年盛んに取り上げている「動的平衡」に関わるように思われる。また、これまで論じられたことはなかったようであるが、ヘッケルの流れを汲む三木成夫が『胎児の世界』(中公新書、1983年) で強調する、劫初以来の生命記憶という問題とも、深く関連するはずである。

59) Ewald Hering (1834-1918) はドイツの生理学者・脳科学者。ライプツィヒ大学では、精神物理学の創始者であるグスタフ・テオドル・フエヒナーにも学んでいる。

物質の一般的機能としての記憶について」⁶⁰⁾をまだ読んでいなかった。ただ、イエーナの生理学者ビーダーマンから、折に触れてエーディングー⁶¹⁾による魚の記憶についての調査のことを聞いており、また、ヘーリングが記憶を有機体の一般的機能と捉えていることは知っていた。

「ムネーメ」に関する体系的な考察はなかなか進まなかった。1903年の晩夏になってようやく、著書の第1部が完成、8月末にはルーバルシュにその一節を朗読している。ゼーモンはノートに、ルーバルシュには「強い印象を与えなかったようだ」(Ebd.)と書いている。それ以降の部分の執筆は速く進み1904年8月末には、著書全体を書き終えた。同年11月22日に発刊されたのが、『有機的事象の変遷における保存原理としてのムネーメ』(*Die Mneme als erhaltendes Prinzip im Wechsel des organischen Geschehens*. Wilhelm Engelmann, Leipzig 1904)である。説明的な訳語を当てるとすれば、「有機体が絶えず変化するにもかかわらず、有機体をそれとして存続させている原理としてのムネーメ」ということになるであろう。

この本の評判をゼーモンはとても気にかけていた。まさに評価に^{かつ}「餓えていた」(hungrig) (L-XXXIII) のである。献本を送ってからわずか14日後、1904年12月15日の日記には、エルnst・マッハからの書簡が届いたことを記している。

12月13日付のマッハからの手紙が届く。私のすべての懸念を取り払い、根本的なことについて私が正鵠を射ていることという、まったく自信を与えてくれるものであった。このような手紙を私は渴望し、日々その到着を待ち侘びていたものだった。(Ebd., zitiert nach Lubarsch)

爾来ゼーモンの仕事は、「ムネーメ」を巡るものに終始した。もっとも論文や著書のタイトルからはそれと分かりにくいものもある。例えば「時刻のリズムは植物に強い印象を残したのか」,⁶²⁾「刺激の概念」,⁶³⁾「獲得形質の遺伝問題について」,⁶⁴⁾ ひ

60) 1870年に行われた有名な講演で、ゼーモンの著書の冒頭でもこの講演が取り上げられている。詳細については次稿以降に譲る。Ewald Hering: *Über das Gedächtnis als eine allgemeine Funktion der organischen Materie. Vortrag gehalten in der feierlichen Sitzung der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften in Wien am XXX. Mai MDCCCLXX*. さまざまな形で冊子化されているが、使用したのは Dritte Auflage. Ostwald's Klassiker der exakten Wissenschaften. Nr. 148. Akademische Verlagsgesellschaft. Leipzig 1921. の21ページからなる小冊子である。

61) Ludwig Edinger (1855-1918) はドイツの神経科医・脳科学者。魚の記憶に関する研究もしていた。1899年にミュンヘンの「一般新聞」にそれに関する記事を載せたようであるが、未見である。Ludwig Edinger: *Haben die Fische ein Gedächtnis?* In: *Allgemeine Zeitung*. München 1899, Nr. 241.

62) *Hat der Rythmus der Tageszeiten bei Pflanzen erhebliche Eindrücke hinterlassen?* In: *Biologisches Zentralblatt*. Bd. 28. 1908. S. 225-243.

いては、「人間の足の裏」⁶³⁾といったものまでである。遺作『意識の経過と脳のプロセス』もまた、ムネーメ理論を補足するものである。

ルーバルシュはムネーメ理論自体に深入りしていない。言及しているのはただ、この理論が「たいへんさまざまな評価を受けたこと、またたいへんさまざまな影響を与えたこと」(Ebd.)である。自然研究者、動物学者、植物学者はこの理論にさほど重要な意義を認めず、ただ「数多くの生命現象に関する、才気に満ち(geistvoll)、論理に適った(folgerichtig)分析」が、「狭義における記憶と生命の再生現象との間のアナロジーを示している」(L-XXXIII f.)という評価であった。

それに対し、この理論に「革命的な」(revolutionierend) (L-XXXIV) 意義を見出し、生物の進化(Entwicklung)、遺伝(Vererbung)、適応(Anpassung)、調整(Regulation)、再生(Regeneration)、ならびに植物界・動物界におけるほとんどの周期的な現象と、高度な記憶との間には、本質的な一致があることを証明しようとしたゼーモンの目的は達成されており、この両者の間には同じ法則性がある、とするゼーモンの主張を承認するものであった。このような見解をとったのは、アウグスト・フォレルやアドルフ・ケルシュ⁶⁶⁾等で、ダーウィンの『種の起源』を引き合いに出し、ムネーメ理論が生物学全体に、ダーウィンと同じような衝撃を与えるであろうことを予言した(Vgl. Ebd.)。

ムネーメ理論は、自然科学のみならず、さまざまな方面に大きな刺激を与えた。すなわち、医師や心理学者たち、それどころか神智学者たちも自分の教義にゼーモンを取り込んだのである。⁶⁷⁾ もっとも——師のヘッケルに倣ったわけではないであろうが——外来語の多用や造語の過多が、本書が理解される妨げになったことも事実である。新聞の文芸欄だけでなく、学者たち、例えばベルリンの哲学者エルトマン⁶⁸⁾もこう嘆いている。「この内容豊かで洞察力に富む記述は、残念ながらテクニカルな人造語で重荷を負わされており、我慢強い読者を要求する」(L-XXXIV f. zitiert nach Lubarsch)。もっとも、事の本質を正確に反映させるためには、さま

63) *Der Reizbegriff*. In: *Biologisches Zentralblatt*. Bd. 30. 1910. S. 181-192.

64) *Das Problem der Vererbung erworbener Eigenschaften*. Wilhelm Engelmann, Leipzig 1912.

65) *Die Fußsohle des Menschen. Eine Studie über die unmittelbare und erbliche Wirkung der Funktion*. In: *Archiv für mikroskopische Anatomie*. Bd. 82. Abt. II. 1913. S. 164-211.

66) Adolf Kölsch (1879-1948) はドイツ生まれでスイスの生物学者・作家。植物学・動物学に関する大衆科学的な本を執筆した。

67) 筆者の関心もこの方面にある。シュタイナーがゼーモンを取り上げていることは興味深い。シュタイナーは講演などで、何度かゼーモンに触れている。今後の研究でシュタイナーがゼーモンをどのように取り入れたのかを解明したい。

68) Benno Erdmann (1851-1921) はドイツの哲学者・論理学者・心理学者。この文は Benno Erdmann: *Wissenschaftliche Hypothesen über Leib und Seele. Vorträge gehalten an der Handelshochschule zu Köln*. M. Dumont-Schauberg, Köln 1908. S. 249 からの引用。

ざまな含意をもつ日常語を排除し、術語を新造することは、ある程度不可避なことである。例えばゼーモンは、生体に及ぼす刺激で、即時ないし同時に作用するものを「共時的」(synchron)と、短時間だけ継続するものを「付随的」(akoluth)⁶⁹⁾と、さらにももとの状態の継続的な変化(興奮)をエングラーフフィッシュ(engraphisch)と呼ぶ。またももとの、理論的にはまだ何の刺激も受けていない状態を第一次平衡状態(primärer Indifferenzzustand)、刺激を受けた後だが一見変化がないように見える状態を第二次平衡状態(sekundärer Indifferenzzustand)とした。しかし、たとえ微弱ではあっても類似した刺激が加わったことによって、一見変化がないように見える有機体は、刺激を受けるたびに变化しているはずである。このエングラーフフィッシュな刺激によって变化した状態の残した痕跡をゼーモンはエングラム(Engramm)と呼ぶ。有機体が大量のエングラムを備蓄し、そのエングラムの備蓄状態に応じて更なる刺激に反応することを、ゼーモンは「ムネーメ」ないし、ゼーモンが最初の草稿で用いていた表現を用いれば「細胞記憶」(Zellgedächtnis)(L-XXXV)と言うのである。フランツはこれを「原形質記憶」(Plasmagedächtnis)(Ebd., zitiert nach Lubarsch)と呼んだが、⁷⁰⁾これは実にヘッケルのである⁷¹⁾と言わなくてはならない。またゼーモンは第二次平衡状態に至ったのちに、ももとの刺激(Originalreiz)と同じ効果と呼び覚ますものを「エクフォーリー」(Ekphorie)ないし「エクフォーリーの刺激」(ekphorischer Reiz)と呼ぶ。

これらの術語は、確かに事態を正確に命名するという目的には適っているもの

69) なんとも訳しがたい語である。パートランド・ラッセルはその『心の研究』で、記憶に関してはその論述の枢要をゼーモンに依拠し、akoluthic sensations という術語を2回用いている。Bertrand Russell: *The Analysis of Mind*. G. Allen & Unwin Limited. London 1921. S. 162, S. 175. 邦訳『心の分析』(勁草書房, 1993年)で訳者の竹尾治一郎は、この語を2回とも「妨げるもののない感覚」(192, 207ページ)と訳しているが、釈然としない。Akoluth はもともとカトリック教会における「侍従」を意味し、ギリシア語の akólouthos, すなわち「付き添い人、従者」(Begleiter, Diener)の謂である。ここでは暫定的に「付随的」と訳出しておくが、次稿以降で再検討する。

70) フランツのオリジナルは、V. Franz: *Literaturbericht. Richard Semon. Die Mneme als erhaltendes Prinzip im Wechsel des organischen Gechehens*. 2. verb. Aufl. In: *Zeitschrift für Psychologie und Physiologie der Sinnesorgane. Abteilung I, Zeitschrift für Psychologie*. Bd. 54. 1909. S. 227-231. Plasmagedächtnis という表現は S. 288. V. Franz が誰なのかはこの記事からは判然としないが、この書評の筆者が「V. Franz (Helgoland)」となっていることから、おそらくは Victor Julius Franz (1883-1950) であろうと思われる。1906年から1910年までフランツは、ヘルゴラント島で海洋生物の調査に当たっていた。のちの話であるが、フランツは1919年、前述のパウル・フォン・リッターがイエーナ大学に多額の私財を投じて設置した系統発生学(Phylogenie)の寄付講座教授に着任している。反ユダヤ主義者で、1930年ナチ党に入党、1935年から1945年まで、つまりナチズムがドイツを席卷していた間、「エルンスト・ヘッケル・ハウス」の館長を務めていた。フランツは疑似的な動物学に基づく、ナチスの典型的な御用人種主義理論家(Rassentheoretiker)であり、進化論と優生学が不幸な結婚をしていた頃の代表者と言えよう。戦後間もない1945年の9月13日に職を解かれている。

の、一般の読者には難しいであろう。また、他にも「なくもがな」の専門術語もある。ルーバルシュが挙げているのは例えば「和声」(Homophonie),⁷²⁾「個体発生における始原的エングラム」(ontogenetisches Initialengramm),「同時および連続的連合」(simultane und sukzessive (sic!) Assoziation),「二者択一的エクロフォニー二項対立」(alternative ekphorische Dichtomieen) (L-XXXVI) 等である。

ゼーモンの著書は、上記のような専門術語の過多という問題にもかかわらず、多くの読者を見出し、7年間で3版⁷³⁾を重ねた。版を重ねるごとに新聞での書評も増え、広く教養層に受け入れられたが、それに比例して批判も増えていった。特に進化論者、とりわけヴァイスマン⁷⁴⁾の周辺からの批判は強かった。ヴァイスマンらは、獲得形質の遺伝というラマルク主義を否定する陣営にあった。彼らはゼーモンが獲得形質の遺伝を前提としているとして、ゼーモンに「ネオ・ラマルキズムの代表者」というレッテルを貼った。

ルーバルシュによれば、それは不当なレッテル貼りであって、「ムネーメ理論」は獲得形質の遺伝を前提とはしておらず、もしも「ネオ・」ラマルク主義が誤りであることが証明されたとしても、「ムネーメ理論」は成り立つとしている。さらに、「ムネーメ理論」はおそらくダーウィン主義を補完するものであり、種が変化しても、外的条件が漸次変化しても、有機体においては多くの特質が、長期間にわたって変化せずに維持されるという原則を示したものである、と主張している(Vgl. L-XXXVI f.)。ルーバルシュはゼーモンを、ラマルクとダーウィンの「仲介者」(Vermittler) (L-XXXVII) と考えているが、以上の問題は次稿以降において慎重に検討しなければならない。いずれにせよゼーモンは、ラマルクとは意見を異にしていたダーウィンは「事を正確に理解しておらず、それによって進化論に不評(Mißkredit)を招いた」(Ebd.)とカムメラ宛ての書簡に記している。

1904年以降、ゼーモンの絶えざる目標は、「ムネーメ理論」の意義をさまざまな観察や発見で補強していくことであった。いや彼は「そのみを生き甲斐とした」(daß er ganz dafür lebt) (Ebd.)。1904年の著書『ムネーメ』の入念な改訂だけでな

71) ヘッケルには Plasma... を接頭辞とする造語が多数ある。例えば「原形質の魂」(Plasmaseele), 「原形質の心」(Plasmapsyche) 等。Vgl. Friedrich Schaller: *Der Zoologe Ernst HAECKEL als Sprachschöpfer und Ideenproduzent*. S. 10 以下の URL を参照した。
<https://docplayer.org/119386621-Der-zoologe-ernst-haeckel-als-sprachschoeper-und-ideenproduzent.html>

72) いくつかの類似した知覚の重ね合わせを意味する。Vgl. Bertrand Russell: a. a. O., S. 229.

73) 初版は1904年、第2版は1907年、第3版は1911年。

74) August Weismann (1834-1914) はドイツの医師・遺伝学者・動物学者。獲得形質の遺伝というラマルク主義を否定する急先鋒で、1882年、遺伝は多細胞生物では精子や卵子のような生殖細胞によってのみ実現するという生殖質説 (Keimplasmatheorie) を唱えた。

く、その他の著作もこの一連のムネーメ研究に相当する。1909年の5月には『ムネーメ的感觉, その元になった感覚との関係における』⁷⁵⁾を出版, その後は病理学(Pathologie)へのムネーメの応用を考えており, その構想を「ムネーメの病理学」(Pathologie der Mneme)と呼んでいた。1913年の年末以降ゼーモンは、身体的病理ではなく、もっぱら心理学的(psychologisch)・精神病的(psychiatrisch)領域に限定して、ムネーメの病理学を進めようとしたが、この試みは大戦の勃発によって中断を余儀なくされた。それでも研究は粘り強く続けられ、1915年の終わりごろには、その導入部が精緻化された。しかしながらこのテーマを継続するためには、さまざまな予備的研究が必要であることを、ゼーモンは痛感するに至った。それは特に意識の過程と身体的な実体との関係の、より精確な研究であった。こうして生まれたのが、遺作『意識の経過と脳のプロセス』である。ゼーモンは戦局に気をとられながらも、1918年の初めには本を書きあげる見通しをつけた。まさにその頃、愛妻の病気が悪化するという不幸に見舞われ、数か月後には、その病が死病であることが判明する。1918年のイースターにゼーモンの妻は他界する。ゼーモンはルーバルシュの目には「力尽き、今後長い間いかなる精神的な仕事にも復帰できない」(L-XXXVIII)ように見えた。

同年8月になってようやく、ゼーモンはまた仕事に取りかかった。8月半ばにルーバルシュが、プレヒテスガルテンのゼーモンのもとに立ち寄った際、ゼーモンは遺作となる本の原稿の一部を朗読し、完成の見通しを語った。しかしまたもや障害が立ちはだかる。ドイツの敗戦が疑いえないものとなったのである。この暗い見通しは、ゼーモンの仕事への意欲や生きる勇気を奪った。ゼーモンには目立って厭世的な言辭が増える。

1919年2月初めないし半ばに、バルテンキルヒェンかプレヒテスガルテンで再会しようと約束して、ルーバルシュはゼーモンのもとを去った。同行していたルーバルシュの妻が、ゼーモンをクリスマスにベルリンに招待したいと申し出たが、ゼーモンは謝して拒んだ。

その後ドイツの敗戦が決まった。戦局が不利であることを見通してはいたが、ゼーモンにとって敗戦はそれでも「不意の」(L-XXXIX)出来事だったようだ。ゼーモンはドイツ民族の優秀性を確信していたが、敗戦後のミュンヘンにおける「道徳的退廃」やドイツ人が歴史の中で培ってきた「倫理的な力」(L-XL)の否定と軽蔑⁷⁶⁾が、ゼーモンを絶望させた。ルーバルシュはゼーモンの日記を引いている。「私は老いと精神的なエネルギーの枯渇を感じている。全部はもとより、

75) Richard Semon: *Die mnemischen Empfindungen in ihren Beziehungen zu den Originalempfindungen. Erste Fortsetzung der Mneme.* Wilhelm Engelmann, Leipzig 1909.

その半分も残っていない。槍の先も槍の棒ももはやない。……めめめとした愁嘆場をもう演じる気はない」(Ebd., zitiert nach Lubarsch)。ゼーモンの生涯は59歳半で閉じられた。最後の言葉は「それでも私の人生は素晴らしかった」(Mein Leben war doch schön.) (Ebd., zitiert nach Lubarsch) であった。

ゼーモンの遺産の一部はイエーナ大学の若手研究者支援のために遺贈された(L-XLII)。ルーバルシュによるゼーモン小伝の日付は1919年8月擱筆となっている。

6. おわりに

以上本稿では、主としてルーバルシュのゼーモン小伝を参照し、ゼーモン個人のプロフィールと「劇的」と言ってよいその生涯を跡づけた。

裕福なユダヤ商人の息子であったゼーモンは、自宅でアホロートルを飼育し、友達に自慢するような、生きもの好きの少年であった。ギムナジウムで教師に当てられると当惑するような、内気な面もあった。第二帝国草創期にナショナリズム的教育を受けたゼーモンは、プロイセンを賛美する軍国少年となる。後年、自らのユダヤ性を嫌悪して、「国家的」理由から、プロテスタントに改宗することになるのである。

ヘッケルの一元論に心酔し、イエーナ大学に進んだゼーモンは、自らアフリカやオーストラリアへ調査旅行に出かけたスポーツマンで、決して弁の立つ方ではないが、前途洋々たる若き研究者であった。

しかし同僚の妻との不倫関係からアカデミズムを追われ、在野の研究者として後半生を送ることになる。ただ、かえてこの「不遇」が、狭い専門性を飛び出し、生物学の根本的な問題を、自然哲学的に考察する契機となった。それは「有機的事象の変遷における保存原理としてのムネーメ」、換言すれば「有機体が絶え

76) これが具体的は何を指すのかルーバルシュは書いていないが、ゼーモンやルーバルシュの政治的な立場がかなり右翼であることを考えると、レーテ共和国や左右の陣営の市街戦を指すのではないと思われる。ルーバルシュはヴァイマル共和国の戦闘的敵対者で、君主制時代の「古き良きドイツ」を賛美していた。反ユダヤ主義を奉じ、ナチズムにも接近した。なおルーバルシュは1933年4月1日に他界したが、「それによって彼は、あるいは醜悪なものになりかねなかった将来を迎えることはなかった」(thus avoiding his possibly ugly future) とマイケル・ケイターは書いている。Michael H. Kater: *Doctors Under Hitler*. University of North Carolina Press, North Carolina 2005. S. 140. なおクルト・トゥホルスキーもルーバルシュを揶揄する詩を書いている。「死体解剖」(Sektion) というタイトルで、ルーバルシュが Iwan Kutisker という(かつては同朋であったはずの)ユダヤ人の梅毒患者をベルリンのシャリテで冷徹な解剖医として「鋭く素早く切り刻む」(最初の3行は Ein Mediziner, namens L., / zersägte neulich scharf und schnell / Iwan Kutisker.) という内容である。Kurt Tucholsky: *Gesammelte Werke*. 1927. Band 5. Rowohlt. Reinbek bei Hamburg 1960. S. 290. もともととは *Die Weltbühne*. Vom 23. August 1927, Nr. 34, S. 304 に掲載された。

ず変化するにもかかわらず、有機体をそれとして存続させている原理としての「ムネーメ」の問題であった。

プロイセン主義者ゼーモンはしかし、第一次世界大戦の敗戦に伴う帝国の解体、そしてなによりも愛妻の病死に絶望し、60歳を迎えることなく、ドイツ国旗の上でピストル自殺を遂げる。

次稿以降はゼーモンの生涯を離れ、「ムネーメ理論」そのものの解明と、その文化史的・思想史的なインパクトの評価が課題となる。

Vorstudie für die „Mneme“-Forschung

— Das Leben von Richard Semon —

Keita FUKUMOTO

— Das Organismus als materielle Substanz ist in der Lage, Gedächtnisse als „Engramm“ zu speichern. Diese Fähigkeit allen organischen Materials, Reize und Sensationen als „Eindrücke“ im weitesten Sinne zu speichern, nenne ich „die Mneme“. Meines Erachtens können diese „Eindrücke“ auf die nächsten Generationen vererbt werden. — So behauptet 1904 Richard Wolfgang Semon (1859-1918) in seinem Buch *Die Mneme als erhaltendes Prinzip im Wechsel des organischen Geschehens*.

Durch die Gedächtnisse scheint es sogar möglich, Informationssysteme wie Bräuche, die Sprache an sich oder den Sinn für ästhetische Empfindungen gegenüber Kunst usw. auf die nächsten Generationen zu vererben. Es wird behauptet, dass Richard Dawkins (1941-) diese angeblich nicht durch die „Gene“ durchgeführte Art der Vererbung in seinem Buch *The Selfish Gene* (1976) als „meme“ bezeichnet habe — was sich gut mit „gene“ reimen würde. Der eigentliche Schöpfer dieses Begriffes aber war Richard Semon, der ihn schon über 70 Jahre vor Dawkins geprägt hatte.

Es ist geplant, diese in Deutschland schon völlig vergessene und in Japan fast unbekannte Theorie der Mneme Richard Semons als kulturgeschichtlich (biologisch ist sie noch umstritten) epochenmachend und einflussreich allgemein bekannt zu machen. Dafür ist es aber notwendig, zuerst mehr über die Person Semon und seine Leistungen zu erfahren, da er uns fast unbekannt ist.

In der vorliegenden Abhandlung wird das ausführliche Curriculum vitae Richard Semons hauptsächlich anhand der biographischen Skizze von Otto Lubarsch, dem ältesten und engsten Freund Semons dargestellt. Otto Lubarsch gab das postume Werk Semons *Bewußtseinsvorgang und Gehirnprozeß* (1920) heraus und verfasste dazu diese biographische Skizze als eine Einleitung. Sie wird durch Daniel L. Schacters Buch *Forgotten Ideas, Neglected Pioneers. Richard Semon and the Story of Memory* (2001) ergänzt.